

海の上の研究室

香

川大学が誇るハイテク船「カラヌス三世」。この船を駆る多田教授、一見准教授の2人は、緻密な研究とは裏腹に、海のようなおおらかさを感じさせる人物です。

世界で有数の海産物の宝庫であり、養殖も盛んな瀬戸内海は、赤潮の被害が大きいことでも知られています。赤潮は、その発生のメカニズムに生物学と化学両方の要素が絡み合っている複雑なもの。発生直後のデータも必要のため、調査のためには船足が早く、必要な観測器具を備えた船が必要になります。「カラヌス三世」は、その要件をすべて備えた船で、多田教授いわく「洋上のマリントラボ」。つまり、海の上の実験室です。香川県の水産試験場の船もカラヌス三世を参考にしたというほどの性能で、船を走らせながら海水を汲み上げて順次測定していく「連続モニタリング」という高度な調査も可能。この船の観測能力とスピードによって、多田教授たちが専門とする浅海域の調査は大きく進歩しています。

しかし多田教授たちがユニークなのは、カラヌス三世を自分たちの研究のためだけでなく、一般の方のためにも利用していることです。高松市郊外の新川・春日川には、大きな干潟ができるのですが、毎年そこで「干潟の観察会」を開催。観察会に応募された親子と一緒にカラヌス三世で干潟にでかけ、沖から干潟を見たり、干潟に棲む生物を顕微鏡を使って観察していきます。図鑑とは違い、実際に自分の目で見た物について多田教授、一見准教授が解説してくれるので、子どもたちも興味津々。生きた勉強の場になっています。

このように大活躍のカラヌス三世ですが、多田教授たちは性能だけでなく屋根があることも素晴らしいポイントだと言います。以前のカラヌス二世には屋根がなかったため、冬場や雨の日はとても厳しい調査だったそうです。また学生が船で調査にでかける機会もあるのですが「三世にはトイレがあるので安心して女子学生を連れて行けま

す」という発言も飛び出しました。かつての調査は屋根もトイレもない過酷なものだったのです。

そういう時代を経験しているからかもしれないませんが、多田教授、一見准教授ともに性格がおおらか。そんな2人を募ってか、研究室にはいつも学生が集まっています。「うちはいつもこんな感じで学生が集まって来ます。毎年留学生がいるので、研究室に来てみんなで話しているあいだにブローキングリッシュがしゃべれるようになった学生もいますね」と多田教授は言います。時には留学生が自国の郷土料理を振る舞ったり、干潟調査の残り時間で掘ってきたアサリをボンゴレパスタに料理して全員で食べることもあるそう。最近どんな組織でも希薄になったファミリア的な空気が、この研究室にはあるのです。それは「海に出る」として無縁ではないのかもしれない。カラヌス三世に乗る時間が、研究室の絆も深めています。



公開講座には全国からたくさんの参加者が集います。学生だけでなく教育者たちからも熱い注目が。



瀬戸内海の水質を定期的にモニタリング。計測・解析されたデータは環境保全や水産漁業などに活かされています。



観測能力が高くて足自慢。
ハイテク船「カラヌス三世」で海へ。

多田邦尚 一見和彦

PROFILE

いちみ かずひこ
農学部准教授
農学博士

ただ くになお
農学部教授
水産学博士